

学道用心集提唱 第一回

仏教伝道センターにて

井 上 希 道

坐に先だつて

今日から道元禅師の「学道用心集」を提唱します。その前に坐禅の心得だけをかい摘んで言います。

一つ徹して我を忘れたら良いのです。難しく考えない」とです。そして自分流も駄目です。一つ事に徹す「」は、只単純に、一つ事を続ける」とです。その間自己はないのです。撤すれば無我が無我を教えてくれるのです。徹することは前後の無い」とです。認めたり認識したりする自己があつたが、徹すれば「」とができない、「一つ事になれます。只する」のです。一呼吸を只する。単純になる、一つ事に単になるのです。是れが禅です。

初めから何も得る者はないのです。妄想を除かず、真を求めず。幻化の空身即法身。法身覚了すれば無一物。もつて是の如く結論はひじと出でこゐるのです。求めて得られる物は、又失う物です。安心が出来るような、思想とか理念とか、考え方とか、意識とかが有りそつと、とんでも無い」とです。そのよつなものなど何も無いのです。

只、徹する事によつて、隔たつている溝が落ちる。身と心とが一つになれば前後が取れる。そつすると自然に執着の元が取れる。心の決定的安定期は、たゞたこれだけの事で確立するのです。

ですから単純に只一息。此だけを徹底してくだされ。吸うばかり。吐くばかり。この単純な一息を、飽きもせず、時間の長短を見ず、出来不出来を見ず、口ひたすらする。是れを撤するところのです。

是れだけの単になる事が禅です。歩くだけの単です。聞く時には聞くだけ。これが禅です。知的分別や感情を加えないのです。馬鹿と言われたら、馬鹿と聞いて終わる。何を見ても聞いても、只その事だけで終わるから、何事も起こらない。何事もない。一切を空じる「」の事です。

初めから禅になつて、只吸い、只吐く。是れを一心不乱にする」とです。只に成ることが解脱です。本当に只を体得するのが坐禅の目的ですから、只、只、只、呼吸して下さい。

学道用心集 提唱 第一回

「これより学道用心集を提唱します。先だつて、道元禅師の人となりに触れておくことは、理解に大いに役立つでしょう。七才にして四書五教を、八才にして春秋左氏伝を、九才にして俱舍論を読まれたといつ。とにかく「」は二百年を超えた超天才だったようです。十三才で出家して比叡山に登り、僅か一年半居る間に比叡山の蔵書を一度精読したと言われています。それで徹底法理を尽くした結果、大疑团が起つたのです。

「本来本法性、天然自性心。三世の諸仏、何によつて修行する」と、あの有名な懷疑の句です。この疑問を碩徳の師に尋ねたが、悉く明快を得ずでした。そのために僅か十五才にして、叡山に学ぶ者無し。京の都に下りて、それから暫し碩学の師を尋ね廻りましたが、一向に埒が明きませぬでせした。

遂に禅との出会いとなりました。支那から禅を持ち帰られたところ栄西禅師に紹介されたからです。言語を超えて、実地に体得すると言つ教えに、道元禅師は深く感銘を受けたようです。直ぐに参禅を始めたけれど、不幸にして半年で師栄西禅師が亡くなられました。

その高弟の明全に就いて六年間研参しましたが納得いかず、共に大唐国に渡り、師を求めてあの大陸を三年間彷

僕つたのです。法理は分かり切っていますから、直ぐに本物かそうでないかが分かり、納得のいく師を尋ね廻られたのです。

言葉ですが、一切経を一度読んで頭に入っていますから、漢文はしっかりと身に付いています。後は音だけの問題です。天才道元禅師にしてみますと、唐音にするだけですから数ヶ月も在れば充分だったでしょう。さほど言葉で苦心されたとは思えません。寧ろその哲理の深さと博学に皆驚嘆したと思われます。

我が門下に天才が居ます。北京語を半年で習得しました。天才の頭脳は計り知れません。道元禅師はとにかく博覧強記ですか、一度見たり聞いたりしたら頭脳から離れないのです。

思つ師に遇えないために、諦めて帰国の船待ちをしていた時、一人の老僧に出合つのですね。これが幸いしたのです。以前一度尋ねたことのある天童山の典座和尚でした。根つから眞面目で本当の道心家でしたし、心根のとども優しく暖かい人柄のようでした。

今度は釈尊直系第五十代の祖、如淨禅師だから間違いないと聞かされて、欣喜雀躍として付いて登つたのです。如淨禅師も一見して、是れは逸材と見抜かれました。尊公は異国人なれど、法のために身を堵してある。これぞ本当の菩提心哉と賞賛して、威儀は別にして何時でもいいから、我が部屋へ来いとの格別扱いです。

やいでも一年棒に振りました。何が、大天才道元をして、しかも正師の元で一年も棒に振つたかと言つひとです。やはり、知性が先走つて、分かる分からんという観念世界に落ちていたからです。つまり、自分の知性に自信を持つていたため、それが自我となり邪魔をしていました。この事に本人はなかなか気が付かぬのです。

知性は、分かると分からんとの両極に分離する機能ですから、分かることと分からないことを分離しては、分かんなど知を巡らす。「」にして知的回転を繰り返す。殆ど永久運動です。「」から脱出しない限り、死ぬまではそれを続けるのです。

即ち、自分の一念すら如何とも出来なくて葛藤惑乱して苦悶するのです。感情やイメージ貪瞋痴からは免れることは出来ない」といふことです。今地球上で起つてゐる争い事は、皆この精神の所産です。

道元禅師が決定的に幸いしたのは、炎天下で椎茸を干していた痛々しげな老僧の姿を見て声を掛けたことでした。

「その様な」ことは貴方が為されないではないでしょうか。若い雲水にして賣つては如何でしよう」と。すると老僧は、「他は是れ我に非ず」と。思ひがけない言葉が返つてきて、道元禅師は「は」としたことでしょ。人のした修行は人の修行であつて、私とは関係がないではないか。そもそも修行とはそつこつではないか。しかし縁が無い時は無いものです。本当は「」で恥じ入らねばなり」といのですが。

「では少し口が傾いてからにされでは」と、娑婆心丸出しをしたのです。相手を見ての親切は、娑婆的には心暖かい思い遣りであつても、仏道修行となると、單なる凡情であり煩惱ですから、「」の老僧が放つておくわけがない。

曰く又何れの時をか待たん」と。修行するといつて何時するのだ。今するしかないと云はないか。それとも別に修行する時と言つものが何處かに在るのか。在るのひ、今此處へ出して俺に見せよ。」の一句は道元禅師「そのように聞こえたのです。この言葉が道元禅師をして、着眼を決定付けたことになったのです。言葉を追いかけていた自分が落ちて、本当の端的に氣が付いたのです。

あつそうか！ 本当の急所とは、今、この瞬間だったのか！ と。このが大切なのです。端的とは此處です。言葉以前の世界、前後の無い解脱底です。これが分からぬ限りのはずれの修行でしかないのです。

彼が十二で出家をして、この事に気が付くまで十五年掛かっています。縁が有つても時節が来ないと気が付かないのです。屢々々々しかない、即今しかない、只すればいい、初めから前後は無いと云つことは充分知つていただけです。法理は分かり切つても、本当の今、この瞬間に気付く」とは、今の今まで無かつたと言つことです。

「これでは言語から離れる事は疎か、煩惱を超えられる訳がない」と氣が付き、端的の打坐が出来るようになり、それから句口を経ずして大悟されたのです。

その長きに渡つて苦しみ続けた迷いの修行時間に対し、自分の苦しみをみんなにさせはならんと、大悲を尽くして書かれたのが、あの正法眼蔵九十五巻です。彼の根底には大法重きが為に深い存念があつたのです。勿論解説の彼には、些かの執着や後悔など有る筈が有りません。ただ、自分の修行を振り返つてみた時、全てが正しかつたかどうか。当然この事は充分反省したのです。自分が失つた無駄な努力と時間とエネルギーに忸怩たるものがあつたのです。「」の端的にもうと早く的確に気が付いていたら、その方法さえはつきりしてたらと、俄然道元禅師はこの問題に存念を絞り込みました。

あの膨大な正法眼蔵が生まれた理由は、正に「」れです。苦しみあぐねた長い過去の反省からです。普通の人なら、箇事究明、大事了畢の大心を得たら、廓然たる即今に大満足している筈です。

ところが道元禅師は全身是れ慈愛の人ですから、大法重きが故にこの正法護持は全人世必須の課題でした。大法しか無い道元禅師にしてみれば当然のことです。

法を思うが故に、あの手この手と、あらん限りの法理と知力を尽くして後人のために南針を垂れたのです。彼が思つといふのものを、悉く文字化し、理を尽くされています。是れでも分からんのかと言わんばかりです。正に道元禅師の暖皮肉です。血滴々です。

五十五才で示寂されましたが、その間、永平寺開闢、造営、鎌倉下向等色々在る中で、九十五巻の大著述をするとなると、大衆説化以外の時間は、殆ど執筆の日々であつたばかりかと、その御労苦を深く敬慕する次第です。

思えば、食事情も悪く、あの湿氣の多い環境に加え、日の出は遅く早口没となると、陽射たりは悪いに決まります。適正快適な状況とはほど遠く、最悪に近い状態と言えまじよ。運動不足もあって、肺病に罹られたのも無理からぬ事です。一代孤雲禅師は頑健でしたから長命を得たのです。

いひなりますと侍者の力量が物を言います。お側にて、充分に注意し気を付けなければなりません。イエズスマンでは「」けないと云つといひです。

「執筆も確かに大事です。が、御法体護持されて一日も御長寿の上、一人でも多くの法の人を育てたい」といひ、本当の仏祖への報恩底ではないでしょうか。いひちが大切ですか」と説得するのです。道元禅師は真心の人ですから、必ず法の意を汲んで下さいます。そしてより法のために振る舞われたかと思います。

又道の人は出された物に対し、生臭いとかベジタリアンでなければとか、何とか漢とか言いません。感謝で何でも「只」食べますから、そつと滋養の物を差し上げていたらと思います。玉子然り。魚だつて蛙だつて鳥だつて、ふんだんにあそこなら居た筈です。それらを折々に捕つて大法の法体を擁護する、これ大切な菩薩行なのです。そんな殺生な事などと言おつものなら、それこそが大殺生罪であり謗法罪です。地獄に入ること矢の如しです。

庭に来て落ち本能拾つ雀らが、鷺(ヌシ)の心をいかで知るべき

釈尊は両親妻子國を捨て、二祖断臂、南泉斬猫、俱胝小僧の指際断、六祖捨母、通幻の活埋坑など、皆大法重きが為に身を捨てての大悲大慈です。罰も又空と体達した真骨頂の境界であればこそ、生死涅槃を超脱し、換骨奪胎せしむるいひが出来るのです。

いひした人天の大導師を擁する事、国を擧げてしても尚足らず、粉骨碎身も尚及ばずです。「」の事を良く理解しておいて下さじ。大乗の慈悲は、とても小乗の戒律主義などの及ぶものではありません。病気などを運ぶ鼠や蠅、「」キブリは的確に捕獲等して処置するのが大乗の精神です。殺すべきを殺さなければ罪です。非実行するといひで人が死ぬからです。間接的に死なせた」とくなるのです。殺すべきと言つことは、人間の実生活で災いを為す時のいひです。そひではなくて、例外なく徹底的に殺すことは悪平等で、殺生戒に触れるのです。

さて、如実に参考するに当たり、道元禅師のあの膨大な祖録に参じなければ取り組んだり、言語的理解をすらだけでも、一般の人でしたら一生懸命掛かります。道元禅師の著作一切は慈悲落草です。全く無用となること

を望んでこるのであります。つまり、眞実の人、隔ての無い人に成る事です。成れば無用の長物で、邪魔物、余計な物であります。

そのための地図ですから、一つで良いのです。全巻の内容は皆、真空を解き、口を示められてこるのでありますから同じです。言い方が異なるだけです。

従つて時間の兼ね合いかからして、修行に必要な見やすい地図を選別して上げるならば、先ず「」の学道用心集です。全体が十章から成つていて、勿論漢文です。修行者の大切な心得を用心として解かれています。

そして普勸坐禅儀です。学道用心集が心得の指南書なら、普勸坐禅儀こそ修行のための実践指南書です。「」に存念を具体化して心血を注ぎ、経験からの理を尽くされた絶妙の法書です。具体的な坐禅の指南書としては、普勸坐禅儀以前に普勸坐禅儀無く、普勸坐禅儀以後に普勸坐禅儀無しです。これに従つて行すれば良いのです。私の提唱を良く読んでもらえば、誤つて理解する事はないでしょう。

更に隨聞記。これは修行者として、宗教家として、人間としての心得です。道元禅師が理想とする姿で示されています。是れも必読の法書です。

今手にする必要はありませんが、更に提示するなり、現成公案、仏性、有時の各巻でしそうか。時が惜しいので外は後回しにして、とにかく行する事です。「」の事も道元禅師の真意なのです。実践努力無くして道元禅師の真意も仏道も分かる筈はないのですから。

とにかく彼は博覧強記です。一度眼にし耳にしたら忘れない」と言つて頭脳ですから、事例が多く出てきます。そればかりまで、次の要点を深く暗示して、本分をより分かりやすくする論調法の一工夫です。だから、例えに対しても深い理解を求めることがあります。横丁に引きずり込まれますから。

伝えよつ分からせよつことしてこのことは、何処までも端的です。手元足下の真実です。最も簡単にして、難易も是非も無く世界が道であることを知らそつとしているのです。ですから、喻えはさりと飛びますから、文字に囚われないようつけて下さい。神々しい言語は、どうしても知性を刺激しますから、これは理解しなければいけない大切なことだと想つてしまふのです。その知的癖があるので、皆引つかれてしまい、分かるために別に又多くの書物を漁ることになるのです。

道元禅師御自身、知的好奇心大勢ですから、多くの天才の書物に触れて来られました。だから、言つておきたいことが有り余っています。判断力も批判力もすば抜けでいますし、生来高貴性に富み純粹無比のお方ですから、法のためとは言え其の非なる点を指摘する、その鋭さは徹底しています。「」の事も承知をしておこうて下さい。

第一章。菩提心を起さすべき事。

これが大事なのです。初発心が方向を決定するからです。志が純粹かどうかで、道に入れるか否かです。同じ努力をしても、逸れてしまつては大変です。初発心には充分気を付けなさい」と言つて下さい。

「右菩提心とは、多々一心なり」

一心とは自分そのもの、心そのものです。本来の心です。色々の言葉があるが、畢竟本来の自分であり一の心です。つまり、是の心の正体を見届けることが修行の目的です。そのため「正しく努力する」とを菩提心」と言つて下さい。多名一心なりとあるでしょ。言葉に用はな」のです。惑わされないようして下さい。あれこれ名前や言い方が有つたとしても、それは問題にするなど。本当に歩く時、そのような者が果たして有るか? 本当に一心を追究するのが菩提心なのです。

「龍樹祖師の曰く」

釈尊十四世の祖師です。一二三世紀の人で、中論で高く、大乗仏教を哲学的理論付けをした始めての祖師です。とにかく理に強い方で、著書も沢山あり、次の句は最も彼の法に対する姿勢を現してゐるもので、道元禅師

もいたく共鳴した絶品の句です。

「只世間の生滅無常を觀ずるの心も又菩提心と名付くと

全て消滅流転してしまいます。吐く吸う。少しも留まつてしない。止まつただけで、人間も動物も居なくなつてしまふ。朝起きる。夜寝る。その間の様子を見れば、生滅無常であることが良く分かるでしょ。これが因果無人の自らな様子です。」の宇宙は無常であり流転しているから命が育まれるし、森羅万象が生まれたのです。是れを因縁性空とも言ひ、假和合とも言ひます。今、仮こと言ひたいのです。是の今が、仮ながら是れが本来の今の様子です。そしてこの流転の様子は消滅しなのです。つまりの今は永遠なのです。

たまたま、仮に、条件によつて今生きて居れる。」の怪しげな存在を、先ず良く理解しゆる」とです。生滅無常だから、どんな事をしてみてもこの身は忍ちぬか累てゐる。この恐ろしい事実を良く知れば、他の頬むに値しない」とが分かる筈だ。こんな自分では安心出来るわけがない」と自覺すれば、大切な時間だから怠惰に過ぐすわけには行かない。血ずから眞実の道を究めたい、心が湧き出で、菩提心となり、求道心となるのです。だから、世間の生滅無常を觀する心も又菩提心となつてくと。

「然らば乃ち、暫くこの心によゐるを菩提心と為すべき者か。誠にそれ無常を觀するの時、吾我の心生ぜず。名利の念起つたりア」

道元禪師は痛く龍樹に共感されたようだす。現実の無常が実感として魂に觀じた者でなければ、本当の菩提心は起つらぬ。何となれば、本当に觀じたら、食りとか茹みとか、貪瞋痴等々、煩惱や吾我の心、名利の念など起る隙間が無くなる。本当の菩提心が起つれば、血ずから血口の無い端的が解るのです。だから本当の菩提心が大切なのです。それなりに

「時光のはなだ速やかなることを恐怖す」

迷いに迷い、日々、時ばかりが過ぎて云々が恐ひし。生まれて」のかた数十年を経て、次第に死に近づいてきた。俺はこのままで良いかど、腹の底から本当に思つ出したらじつて居れない筈だ。本当に時の過ぎるのが恐ろしい、と分かる者は救われる。畢竟お前はどうだ。未だ裟婆事につづきを抜かしているのかど。

「所以に行道は頭燃を救う」

行道は本当に道を求める事です。畢竟どうするか。頭に火の粉が落ちて燃えだしたら、文句なく忽ち両手で払い除けて消し止める。誰でもそうするでしょう。そんな時、あれこれの余念が有るか。躊躇するか、絶対にしない。これが菩提心の働きです。これが行道なのだと。だから煩惱妄想の炎が起つたら、直ちに払いのけ切り捨てなさい。つまり、真剣に即念を守り、本来の端的を守るのが本当の修行だと。菩提心は即行、即端的、即真です。

「身命の牢からだの」とを顧問す

身命とは身命です。」の身体や命なんて脆いものです。普遍の確固たるものは何も無い。あつと言ひ間に消えてしまつ代物です。娘が、お母さんが苦しみで云々電話してきました。行きましたら話してきました。抱えてほんの少しだした時、首がだらりとして、それでお終いでした。

我々修行者は生き死の本質を究めるのが目的です。だから、そんなに云々驚いている暇はありません。生死とて日常の様子です。出た息が入り、入った息が出る。起きたり寝たりと同事です。あつ、矢張り人事ではないなど。ただそれだけの話です。皆さんといへ、誰も皆同じですからね。大切な人や、愛する人が、あつと言ひ間に死に神の餌食になるのです。何が本当に頼りに成るのか成らなかが、」の事を先ず肝に銘じておけと云ひます。顧問は振り返り見ゆ」とです。

「所以に精進は翫足に慣らひ」

翫足とは爪立ちです。立てこもつて待ちがれ」とです。こよつよ菩提心を起して師匠を訪ねて行つた。あいにく師匠は所用で出かけた。そしたら居ておらずして居られなくなり、今か今かと師匠の帰りを爪立ちして待つていたという故事です。美風として感心するのではなく、本当の道の人はそうではなくてはならぬのです。

釈尊が或る夜、夢で觀音様か菩薩様が自分を励ましてくれたのです。挫けそうな自分に「それが嬉しく有り難くて、一週間ずっと爪立して、立ち去つた方を押まれた」といふのです。当然そばかりだったので、余念が落ちて一心に成り、清淨になつてゐる自分に氣付かれたのです。つまり、現實として心の縛れがほつと取れて樂になつたのです。それが余程有り難かったのです。取り分け大切なのは、いじつて修行の取つ掛かりが分かつていく」のです。元は菩提心です。

平素、真剣に求めるならば、自ずからその様に成るのです。だから本当の菩提心がどれ程大切かを良く自覺しないで、強調して「ゐるのです。」自分でなければ物には成れないからです。

菩提心と簡単に言つが、次のことが出来なければ本当の菩提心ではない、よく聞けよと言つ真意を見逃してはなりません。道元禅師の心に成れば皆見えたのです。「これを言わざ語りといひのです。

「たゞえ繁那迦陵讚歎の音声を聞くも、タベの風耳を払つ」

繁那迦陵讚歎の音声とは、身も心もとにかくそなへる程美しい音色。音樂や鳥の声、甘美な歌声などです。そのよつた素晴らしい音声であつても、翹足の求道者にとっては、夕方の風が耳元を吹き抜けるに過ぎない。心を取られず、「口」聞いて終わるより努力しなさい。さればどんなものを聞くも、心に一切問題が起らぬ。何の執着か是れあらんです。聞く底です。この時、聞く音も無く聞く自己も無い。只聞く時、一切の音声、皆繁那迦陵讚歎の音声に非ずやと参究するのです。耳が繁那迦陵と思つか? 耳が讚歎するか? 菩提道心は耳の端的に参じ即今底に参る」とです。

「たゞえ毛而西施美妙の容顔を見るも、朝の露眼を遮る」

「これも同じ例えです。見聞覺知の消息を氣付かせよとの慈悲です。毛而西施美妙の容顔とは、猛將軍や堅物官僚の心さえも搔き乱すほどの絶世の美女です。例えそんな刺激的な人が目の前に現れても、只見よ。心を盗られる」となく、幻のように忽ち消える朝露の如く、眼の眞にじておけ。心に持ち込まなければ即端的だぞと。端的には見ながら眼の無き」とです。見る自分の無き」とです。

大燈国師は二十年の間、乞食隊裡に紛れて聖胎長養されたでしょ。その時に詠んだ歌が、

五條京架の橋の上 往き来の人を深山木に見よ

深山木なら何心無く 只見ゆでしよ。往き来の人を見るのも、その様に「只」見なすこと言つ道歌です。同じよつて天桂禅師は、

五條京架の橋の上 往き来の人をそのままに見よ

同じ事です。つまり、計らわずそのまま、「只」と言つ」とです。この大事な急所が会得出来たならば、と続くのです。

「すでに声色の繫縛を離れば、道心の理致にかなわんか」

声色の繫縛を離れば、「只」見、「只」聞くなりは「離つ」のです。見聞覺知に心を盜られなければ、既に道の人であるがと。そこまで行道するなら、道心の理致にかなつて「る」と言ふ。これなら本当の菩提道心の様子だから、祖師方の心に叶て合格点だと。

「往古來今」

昔より今日、そして及未来に到るまで、全ての人たち。

「或は寡聞の士を聞き、或は少見の人を見るに多くは名利の坑に墮して」

支那の科挙は登龍門で、名利榮達を得る公的手段です。一生懸命勉強するのは何故か。それに合格して役人になり、良い立場を得て榮耀榮華に暮らすためです。そのための努力は単に欲望追究に過ぎず、煩惱の繫縛を離れて真箇の成功を修める」ととは全く違つ。そう言つ風な名利の坑に墮したら大変なるとなるから真似ではならない。

「永く仏道の命を失す」

かような者と成つたら所詮浮かぶ瀬は無い。欲望を好くし、我を元として貪瞋癡の奴隸にならてしまい、解脱の法門は思いも及ばぬ事だ。よくよく反省せよ。井原の平四郎は心清淨にして、よく修行者の外護をしていた。ある日、法堂の「勇猛の衆生成仏一念に有り。懈怠の衆生涅槃三祇に涉る」の句を見て奮然とし、無字三昧に成つて三日三晩でぶち抜いたのです。菩提道心を起し、永く仏道の命を得たのです。

「哀むべし惜むべし、知らずんばあるべからず。縦ひ権実の妙典を読む」とあり、縦ひ顯密の教籍を伝つゝ「とあるが、未だ名利を抛たずんば、未だ発心と称せず」

尊い生涯なじみ聞へ苦しみで死ねばかりの浮かぶ瀬の無い人生をするとは、真に惜しきことだし哀れなことだ。知らずんばあるべからずの句は、上にも下にも利いてゐる。この事を良く知つておけと今はまだに掛かるし、これから私の言ひ」とを良く聞けよと後にも掛かるのです。

権実・顯密の一いつを掲げ後を省略して、喻え天台や真言やその他諸々の經典教籍など、幾ら精通しても、未だ未練がましく名利を貪つてござるのみでは、とても発心とは言わさぬ。道元禅師は内心、喻え仏祖が許しても、是の俺はそのような不純な者など一切認めぬぞ。何が発心だ。正法眼藏、涅槃妙心、解脱の法門を何と心得るかと、言いたいのです。これこそ道元禅師の真骨頂です。

本当の発心とはと命題を暗示しておこし、祖師の言を次に出して徹底検証するのです。如何にも道元禅師らしい純粹一途の徹底振りです。

「有が云く、菩提心とは、無常正等覚心なり。名聞利養に拘わるべからず。有が云く、一念三千の觀解なり。有が云く、一念不生の法門なり。有が云く、入仏界の心なりと」

無常正等覚心と難しい言葉を使つておりますが、つまりは菩提心とは解脱だから、名利に拘わらない。とか、一念が縁に応じて無限に働く、即ちこのことを知る事だ。とか、一念も起らぬ寂とした心だ。とか、涅槃の心。とか、古人が色々に菩提心に就いて言つてはいるがど。これらの言に対し、そのそり道元禅師が論攷反駁して正邪を正すのです。正に天下第一の最高裁判官が、正法法廷で裁く見事振り。罪條は菩提心の眞偽です。

正法を任す者は、切に高祖の意を看取しなければならぬといひです。

「是の如の輩は、未だ菩提心を知らず、猥りに菩提心を誇す、仏道の中に於て遠して遠し。試みに吾我名利の眞心を顧みよ。」

仏祖の消息である即今底の端的を充尽するためて命がけの努力をする。「これが祖師の言ひ行道であり菩提心である。といひがこれらの輩は即ち菩提心の理さえ知らないし、全く真実を知らない」としない。徒に菩提心を論ずるが皆出鱈田で、単なる理屈に過ぎず、全く取るに足らぬ。今、この瞬間、仏道なりぬ者はなつて、この体たらくは何としたい」とか。菩提心に対して大いに釈当たりない」とだ。

人は知らぬ。だが、この道元だけはそんないい加減なまやかし文句に誤魔化されたりはしないぞ、との大抱負が照魔鏡となつて後人のために道を照らすのです。

「此處から道元禅師固有の手腕で打つて出るので。正邪を見分けるために、試みに吾我名利の眞心を顧みよ」と頂門の一針を刺して、我等の足下へ注意を促し、実參実究の着眼を得てはすべく仕掛けたのです。

試みて、見る今、聞く今、この瞬間、何者があるか、深く參究して見よ。

吾我とか名利とか、是非や善惡、自他凡聖等、有るか否か。

有るなり即ちの心を、無こなじ當にその心を、今、此處に出して見せよ。と詰め寄つて即今底を促したのです。実地が問題なのです。この心です。この切実なといひを真剣に參究するのです。吾我名利のみならず、如何なる念であつて、即ちその心は如何と顧みるのです。

「の心、何れより来る。と參究するのです。この努力心には、一切の吾我名利など無いでしよう。道心とは、菩提心とは是れを言つのです。これが仏道に叶つた、生きた修行なのだと。

「の菩提心があれば煙草を止めるとなど簡単です。吸いたい心が出たら直ぐに、この心は何処より来る。と

深く参究するのです。真剣に二日もあるべく吸いたい念に気が付いた瞬間、スカッと切れて何の執着も残りません。何なく止められるのです。正に菩提心の賜です。志如何です。念の元、心の元などは何處にも無いから、即今底を護つておれば、自然に心の癖が切れるのです。

「一念を解決しなければ、真の平和は得られる筈が無いのです。正に急を要する根源的課題です。けれども世界的に皆知的教育ばかりだから埒が明かないのです。人々が動物であり弱肉強食の性を内在してゐるから、これを携えてくる自己を超える必要があるのです。でなければ縁に従つて直ぐ飛び出してくる代物です。

通常では皆、今今の縁に応じて何事も有りませぬ。相克関係が無いからです。今ここに、不特定多数の者が時を同じやうして頭を集めておりますが、出会いに頭に喧嘩したり殴り合つたりしますか？ する筈が無いのです。敵対心や恨みの念が無ければ、何事も起らなくなるのです。

といふがそつした怖い念が出てくると、念が念を刺激し問題が起きて葛藤し、厄介なことになるのです。といひが、「当心や如何に」と参究するならば、内在していた過去の猛毒は、血ずから無害化して、那人を平安たらしめるのです。

「の念が無念であれば、一切問題が起らぬ。世界の平和は自分の心を決着すればそつと訪れるのです。」の根本は「当心や如何に」と参究努力するのです。これが本当の菩提道心あり、本当の修行です。

「一念三千の性相を融するや否や。一念不生の法門を證するや否や。唯だ貪名愛利の妄念のみ有りて、更に菩提道心の取るべき無きをや。」

「よ」よ道元禪師は結審に臨むのです。道元禪師ご自身、さざれんに苦しんできたものですから、大切な要点を確実に動機付けるために、いひこゝ激しくて言つ方をわざとねねのです。いひが道元禪師一流の慈悲であり情熱です。

今は今にして今ではない。一念三千の性相とか、一念不生の法門とかは、既に心情流注で業識ではないか。端的にそんないちやうじやしたものが何處に有ると言つのか。ど、判決理由を述べて、「唯だ貪名愛利の妄念のみ有りて、更に菩提道心の取るべき無きをや」と判決を下したのです。

貪名愛利とは煩惱を初めとして諸々の妄念です。闘てから起る奴です。自我の妄念が、心中いつよしてこらではないか。何處に菩提道心の欠けたりしたものでも有るどこののか。みな偽物じやと、無期懲役を申し渡しつつも、われど済度のための方便を垂れるのです。

何が故ぞ。一たび発心慘悔して自未得度先度他の心を起せば、一切衆生の導師となる器であり、罪も又因縁性空だから一転すれば光明なるのです。

「古來得道得法の聖人、同塵の方便ありと雖も、未だ名利の邪念ありず。」

間違えてはいかんぞ。古來の聖人も方便として同じような言葉を使つてはおるが、真空妙有を得た純一無雜の聖人方は、名利の邪念などうの毛程も無い。だからそれらの輩と一緒にするなよ。

「法執すら尚ほなし」

求心も清淨無垢の信念等も、無我も悟つも、持つたら災厄を為すので煩惱と回じです。これを法執と言つのです。端的には何者も無い、無ことこつ者も無いのです。

嚴陽趙州に問つて曰へ「一物不生來の時如何」。師曰く、「放下著」。嚴曰く、「既に是れ一物不将来。是の何をか放下せん」。師曰く、「放下ならせば擔取し去れ」。嚴此處に於いて言下に大悟す。

何者も無いといひ、大事な端的に漕ぎ着けても、それを持つたら煩惱に如かずや。無ことこつ有我ではないか。是を法執と言つ。師曰く、「それを捨てよ」と。嚴曰く、「既に何者も無いのですから、是の何を捨てるのですか？」師曰く、「そんなに無こと言う者が好きなら何時までも担けあれ」と言われ、大きな法執が此處で落ちて、嚴陽は大悟したのです。何も無いところ者も超越し、永久と無限をも超えて大法の人となつたのです。

「況や世執をや」

当然の如いです。」「は良く分かつますよな。

「所謂菩提心とは、前來云ふ所の無常を觀ずる心、便ち是れ其の一なり。全く狂者の指す所に非ず」

所謂菩提心とは、今まで解じてきただことだ。其の一ことは、始まり、元、純一無雜の端的です。即今既にそれです。求めるものでも、得るものでもない。この事を知らない無眼子の連中が、恰も尊い高尚な道理が有りそつと語つて居みが、「の道はそんなものじゃなし。

「彼の不生の念、三千の相は発心以後の妙行なり、猥るべからざるか。」

邪師の言つ不生の念とか、三千の相とかは、隔てが取れて端的を行する「が出来ぬようになつてからの話だから、つかり取り付くなよ。騙されぬか」と。

「唯だ暫く吾我を忘れて潛かに修す、乃ち菩提心のしたしきなり」

唯だ暫くは軽く見る。とにかく何もかも打ち捨てて、我を忘れて即今「只」を鍊りなさい。内側から發してくる求道心に基づいて、今今、「淡々」と行じなさい。これが出来れば眞実の菩提心だから。

趙州禪師に、新参者が自分は入ったばかりで、「のよう^に修行した^いよ^う」のが分かりません。どうか教えて下さい」と正直に懇願した。この素直さ、「の正直さ^が、「の真剣さ^が菩提心の虫肉です。州曰く「お粥を食べたか?」。僧曰く「はい、頂きました。州曰く「いや、器を洗えば宜しこ」と。唯だ暫く吾我を忘れて潛かに修す、乃ち菩提心のしたしきなり。何處にも吾我はない、唯道有るのみ。この端的を見て取らねば菩提心とは言^えないのです。「の僧、此處で菩提心の何たるかが分かつたのです。

「所以に六十二見は我を以て本と為すなり」

六十二見とはインドに沢山ある外道の見解です。お釈迦様が仏道を掲げるまではバーヒンの全盛期でした。バーヒンの哲学、宗教觀は相当のもので、知的には大した者です。こうした沢山な法門も、知的解釈に過ぎないから皆吾我を執の上での狐狸窟^{じや}として却下したのです。「のした物には触るなど言^ひう」とです。

「若し我見を起す時は靜坐觀察せよ」

もし世念凡情が出て即今の端的が護れぬよつたら、その時は潔く静室にて坐禅しなさい。觀察せよとは、念がぼんと出たが、間髪を入れずその元を尋ねてつけ。瞬間の出来事故に、一瞬を見逃すなど言^ひうとです。前述の「当心や如何に」と參究する^いうとです。

更に言^ひえ^ば、しゃばりへ動く^いうと止め、求めたり^いうと止めて、勉強する^いうとなく、身に為す^いうとなく、心に迷う必要の無^いうとにして、静かに坐れ。要するに何もするなど。

目的を持つと仮想の結果を想定する。そしてそれを達成するために、手段段取りを考える。目的と結果は向^いうの未来にイメージを作り出します。これら全て虚像の世界です。勿論計画として考へるべき時は、これは煩惱ではありません。けれども空想世界は虚像ですから、決して本来の今と重ねては成らないのです。

ところが目的としての仮想の結果を掲げて、それに向かつて行為する身体は、今、今確かに現実です。だが心は現実の今から離れて虚像空想の世界です。「これが身と心が離れて惑乱する、混沌の構造です。

「の状態である限り、煩惱の芽が枯れぬ^いうとは無^いうのです。だからとにかく何もしな^いうが最善の解決策です。求める必要がなければ心を持ち出し觀念を動かす必要がない。だから自然に心身一如と収まる時節があります。だから静坐せよ。そして或る時には次のように觀察せよと。

「今我が身體内外の所有。何を以てが本と為んや」

今、自分の身體と心。自己と環境との現象。様々な作用。「れりは一体、何が本質なのか、しかと參究してみよ。本来本法性、天然自性心とあるが何んだい^いう。

知らずして生まれ、知らずして言葉を覚え、知らずして見て、知らずして聞く。知らずして大きくなり、知らずして恋をし、知らずして老いる。そして知らずして死ぬ。何が本^いうのよ^うに自由自在に作用し活動するのだうかと參究し、安易な気持ちで過^いるやうな^いうです。何となれば、菩提心が弱まる^いう即^ち聞覺知に翻弄されて心が濁

れるからです。濁れたるとは吾我執着に落ちたるといひります。

「身体髪膚は父母に稟ぐ、赤白の一滴は、始終是れ空なり。所以に我に非ず」「
」の身体は自分で作った者でも何でもない。父母の縁に依つて、知らぬ間に生まれて^レの様な身体に成ったもので
す。赤白とは赤白です。赤は血、白は乳のことと思ふがよいです。血は女性の象徴とか、白は男性の精液とか。今
はそんなことはじめどもここのです。^レの身体の事を語つてゐるのです。我々は因縁所生の法に拘り、不可思議な縁
に拘る假有なる者であり、始終是れ拘み所のない空なる者のです。それが証拠に、自分で作った処の物など何處に
も無いでしよう。本来自分と言ひ者は無つのです。自分だと思つて「^レの身体への執着心です。

つまり、そういう縁に依つてたまたま我々の身体があるだけなんだ、と語つ話します。じゃからこんなものは縁次
第で、何時ようと消えて無くなるか分からぬ、真にあやしげなもので。だから何事も^レして吾我を離れないさ
いと。

「心意識智、寿命を繋ぐ、出入の一息、畢竟如何、所以に我に非ず」

心意識智は精神作用です。寿命を繋ぐとは、色々ああ、いやいつじやと考えを巡らせて、生きてこな」とを美感す
る事です。心意識智が「^レくなると、自覚が「^レくなつて生きている実感は無い。つまり、自分にとっての寿命では無
くなるのです。^レは精神面の事。出た息が入らなかつたり、入った息が出なければどうなる。生死共に縁の者
でしかな^レ。手近な身体の様子を、正しく素直に見れば、自分と語るべき根拠など何も無いことが分かるであ
り。「^レのせりきり一杯の切実な所に、どうじやどうじやと自分に問いかけて見よです。

「彼此執すべき無きをや。迷う者は之を執し、悟る者は之を離る」

仮に身体と精神を^レに分けて解いてみましたが、何れも執着すべき確固たるものなど無い事がはつきりした筈
です。^レの点をもつ一度よく觀察して納得しておくれ^レです。

然るに、それでも迷う者は、絵に描いた餅と本物の餅と見分けらず、何処までも^レ我に執着して苦しみ、悟る者は
は実と虚じを正しく分別して、我執を離れ安樂を得るのだと。

「而^レて無我の我を計し不生の生を執し、仏道の行すべきを行せず、世情の断すべきを断ぜず。実法を厭ひ妄法を
求む」

なのに、吾我を立てて無我を求めたり、又念が起きな^レよつて計らつたりする。心が騒がしく苦しこと、どうつ
ても雜念を取つて早く樂になら^レとするものだす。^レは矢張り血口を元にしてゐるので、悟れな^レのです。
求める吾我が有つたら、端的に曰く覺められな^レ。どう^レの事が分からんのか、深深くそのことを観得せよ、
と言つたげです。どう^レとも修行を忽せ^レ出來ぬ故です。

世間は吾我の突つ張り合つてから、妄執対立が普通であつて、眞実を^レとする道は嫌われても仕方がないが、仏
道としてはとても認め^レとは出来な^レ。^レは本当の菩提心が無くて、本真剣で即今底を行じないからであ
り、世俗の念を断ぜず凡情に遊んで^レるからです。^レした輩は根本が濁れて^レるから、眞実の法を疑つ恐れて退
けたりするものです。そして邪師の解く妄法を信じてしまひ。實に哀しむべく恐るべき事です。

「^レ錯りやれや」

「の句で、第一章「菩提心を発すべき事」の最後です。實に切実なる獅子吼で締めくくつて^レます。^レれを過ち
と言わなくて何と言えば良^レのだつ。本当の仏道を行じない限り世情を断^レる^レは出来な^レし、從つて名譽物
欲錢欲の汚辱に苛む^レとかは抜け出られな^レ。^レの事を悟る者は之を離れる事が出来るが、迷う者は過ちを
改める^レが出来な^レ。^レ錯りやれやです。

過ちを過ちと知る、是れ道の人。過ちを過かんと知らず、是れ凡夫。過ちを過たとせざ、是れ狂者。とにかく早く
真箇の菩提心を起^レし、実地に行^レするしかな^レのです。是れを看取する者果たして幾人か有る。參。

三時が一寸過ぎました。今聞いた全てを綺麗に忘れて、今、只、淡淡と。再び打坐して下さ^レ。これは解脱の必
須条件であり基本です。

味その物になつて下さる。頭で味を追究してはいけませんよ。味その物に尋ねてこくんです。じつへつ味わうんです。味その物に面白が有るか、煩惱が有るか、是非善惡があるか、迷いがあるか、前後があるか。これを百分の一秒、千分の一秒と云つ、鋭さ、綿密さで追究してこくのです。これを味に参するところのです。言葉を換えたら、味に撤することです。是れを味合つて下さる。

私の隣りにこらへしやる。仕職は、昨年の暮れに、京都の会議が終わつて帰る時に、新幹線の中で出合つた方であります。驚いたことに、隱老師から義光老師、義衍老師、原田雪溪老師など「存じで」、而も宗派が違うんですよ。流：私は先ずこの事に驚いてしまつました。それで又、お人柄に驚きました。實に高潔にして爽やかで、しさぎが良くて。それで別れました。その後、奥さんと、奥さんの母さんと二人で少林禪道場に現れたので、一度びつくりです。その様なお方です。自己紹介をして頂きます。禅に対する、些かの造詣もお有りのようだ、お伺ひしてみた」と思ひます。」きなりで恐縮ですが、では。

井上老師とは、本当に「ゆりこり」縁なのでしょうか。ほどのかよりどすれると遇えなかつたのでしほうが。京都のお帰りにお遇いしまして、私は眞言宗なのですけれども、兄弟子も禅を體つてゐたので、その時に、義衍老師のお話も聞いておりまして、自分の修行の功夫と言ひことに就いてです。自分のお師匠さんは申し訳ないんですけども、それ以上に、功夫の事で力強く影響を受けました。

私も井上老師とお遇いして、義衍老師の話しが出た時は、本当に自分でびっくりして、まあ、派は違いますけれども、自分の問題を解決すべき事と云つのは、何も変わらぬことで、そつと聞ひ入る関しては何の抵抗もわだかまりもありません。

ですので、今口は老師がお出でにならぬと嘆ひながら、田向にて參りました。今日のお話を充分に歴みしめて、もう一度、自分に聞こ直してみたこと思こます。

私は埼玉の狭山市に居ります。流ともうします。一文字で「流」と書きます。

老 師・ 東京の参禅会の、今日の雰囲気と云つてか様子を「」覽にこなれて、ゆつ感じられましたか。

流 老 師・ 先ず、大勢なのにびくつしました。私も色々な参禅会に出ていますが、「」のよつて真剣な気持ちが皆さんびたりとされてるのは初めてです。見たことは御座いません。一円に一度あるとお聞きしましたので、又来させて頂きます。

何れにせよ、自分の問題ですから、人の「」などはどこかし質問されることが良ふと思います。是非、「」の雰囲気を大切にして下さる。

老 師・ 有り難うございました。一度聞いたら忘れないお名前だと思います。本当に小気味の良い人柄で、正しく神そのものの人だなと実感します。これからは、深い法友になつてこくではないかと思います。宜しくお願ひ致します。

それから、伊藤先生。ちょっとお立ち頂けますか。今田の為にわざわざ山島から来られました。その主は、先般パリへ行くに当たつて皆さんから頂戴したカンパの御礼と同時に、行きました内容報告を是非して、御恩に酬いたといふ出で頂きましたので、早速なが先生の方から「」報告をして頂きましょひ。

伊 藤・ 伊藤と申します。十一月には皆さん、カンパを頂きましたが、難ひました。スタンス・サンといふ方が、少林窟で参禅されて、その参禅記を書かれるに当たつて、又諸々の開けのため「」フランスへ行きました。その写真が有りますので、「」覽になつて頂きたいと思います。

「スタンス・サンはカトリックの古い教会の中のホテルに居まして、私もそこでお世話にならってきたんです。大変良いところです。後は質問して頂ければ、お答へごいたします。老師の方から、具体的に、質問して頂けませんか。」

老師： 何時行かれて、何時帰られたのでしょうか。

伊藤： 十二月の九日に発ちまして、四十日ほど、フランス、ポルトガル、そして又フランスと滞在しました。

老師： ずっと教会巡りだったのですか。

伊藤： フランスは前後二週間、スタンス・サンと共にやべ話ました。前半は、十名ほど、四万をしている方達

と親しく、少林窟を紹介させて頂きました。

老師： …では内容に入りたいと思います。ヨーロッパはキリスト教文化でございましょう。ベースがキリスト教

的な思考にならっていると思うのです。信仰とか宗教といいますと、禅は他を見ずに直口を呑む。彼等の理解というのはどうんなですか。

伊藤： スタンサンの知り合ひの方は四万をやつてこられたもあり、割と理解されたようでした。三の方が少林窟に参禅したいと仰いました。

老師： 禅は解脱を主体にした行ですから、彼等にどうて解脱、悟りについての理解はありますか？

伊藤： 僕はそこまで一人々々に突っ込んで聞こておりませんので分かりません。

老師： ああ、成る程。ヨーロッパでは、いつも少林窟風の坐禅の解き方、指導の仕方方が、抵抗無しに受け入れられそうですか。

伊藤： 抵抗なく受け入れられると思います。その為にも、早く老師に来て頂いて、指導の程賜りたいと思つております。

老師： 分かりました。

伊藤： スタンサンの参禅記が有りますので興味のある方はぜひご覧になつて下さい。

老師： フランス語ですか？

伊藤： はい。（大笑）

老師： ところでスタンサンが、「ヨーロッパ少林窟道場」の窓口のよつな主席のインターネットを立ち上げたと聞きましたが。

伊藤： 少林窟道場を紹介するよつなものを制作中です。

老師： 伊藤先生のフランス訪問、大変な成果であったらうと思します。初めから多くを求めたら必ず失敗します。一個半個でよこのです。本物の一個半個を育てれば、それがおのずから星になり、月になり、太陽にならいくんじです。

少林窟は多くを求めるのではなく、本物を求める宗風です。「少林窟」とで今回は大成功であつたうつと思します。今後も一つ伊藤先生宣しくお願ひします。（拍手）

伊藤： 有り難うございます。その時はまたカンパ宜しくお願ひします。（拍手）

老師： では、通常の茶話会に戻りたいと思います。初めての方、手を挙げて下さい。

初めての方に感想をお聞きしたい。

参禅者A・・ 大田区から参りました。感想といつか質問でよひしでしようか。坐禅とか、解脱とか、悟りだとか、色々な言葉が有りますけれど、そもそも人間が存在していなければ禅も何も無いではないか。そんなこと関係ない、いやないか、と思つんですけど。にも拘わらず、何故、こんな事をして存在しなければいけないのか、或いは存在させられてくるのか。どこのことが私はずっと疑問に思つてこたのです。

悟るところとは存在が消滅すると云うことであります。

老師： 実にユーモアで面白い、そして核心を衝いておる。私はいつこの質問はわくわくするんですね。一つの視点からお話しする必要があるかと思ひます。

一つには、何故人類として存在するかといふ生物的な因果関係からです。これは生物が進化していく過程上、自然発生的に両足歩行が始まりて、知性の自己増殖型で概念を持つよつてなり、言葉を持つよつて成了た、進化の中から自然に発達したもののです。だから、これは必然的に生まれた大自然の流転の一環なんですね。

つまり、言葉を生み、概念を形成し始めて急に知性が発達した結果です。知性によつて虚像仮想世界を構築する。乃ち自己実要求と感情がもたらす衝動作用に拠つて、著しく理想や欲望が刺激され、自分だけの観念世界を形成するよつてなった時から、知情意の連れ現象が起つてだしたのです。これが自我であり葛藤であり惑乱現象です。自分で作った精神現象に、自分が振り回され持て余してゐる様子です。

是れにより諸悪が生まれ、それらを何とかしようと宗教や哲学が生まれたのです。又一方においては、そつとした人間的苦しみ喜び感動願いなど、大凡誰もが内在している情動作用を形にしたもののが、文化といつもの芸術です。音楽然り、絵画然り、彫刻然り、文学然りです。

ところが是の正体不明の実体無き心だけは、如何に知性の限りを尽くした哲学も宗教も、根底的解決は出来ない靈体なので、どうすることも出来ないので。何となれば、知性も感性も意志も、心のほんの一部の作用でしかないからです。この事を又、知性自体が自覚することが出来ない、超時間的、超空間的存在だからです。心の作用は、全進化過程の超時間的存在だと言つてです。つまり、計り知れない長い時間を掛けて、経験的に獲得してきた種の特殊性として、是れまた計り知れない要求や反応傾向を、生まれた時から誰もが携えているのです。それが前生の因縁を携えていたと言つてです。人間らしく、犬らしく、牛らしく、それぞれの種を種たらしめているのはその為です。

心は又、空間的存在としても限りが無いのです。何故かといふと、形や塊物としての本質的存在物が無いため、場所としての定まりが無いからです。言うなれば、全宇宙的であり、是れといふ者が無いので、心なる者は何處にも何も無いのです。だから決定的に自由であり、それ故決定的に厄介なのです。

身体に内在する要因からも、矢張り無限なる全地球規模、全時間規模であることです。どういふ事かと言えば、有情である動物も植物も、元はたゞ一つの単細胞に過ぎず、それが超時間的縁の流転によつて、今日のよつた多様にして華麗な生命進化と発展を遂げたものです。しかも、たゞ一つの命が育まれ分化し成長を可能にした物は、時間は勿論として宇宙に存在する水や鉱物質等あらゆる元素と、多要素を含む光りと多要素のガス等が、無常の流転と、絶妙な縁の関わりに拠つて成り立つた物です。

つまり、元は一つであり、一つの分かれであり、それそれで在りながら同質的共有関係に在ると言つてです。お互いが分身なのです。此処からも万物一体の様子が分かる筈です。自我を取り払い、生前の自然体になると、我々の存在は個としての領域的な意識のナリトリーから解放されて、全てと同化し一体融合するのです。それは人間の計らいによる汚れ、即ち時間空間的諸条件に束縛され、狭隘化された自己から解き放たれた瞬間なのです。

このよくな時、風の心も雲の気持ちも、岩や山の声も確かに伝わってくるのです。そのような限りない優しさと離て無き心が、風となり雲となり、岩や山となつてゐるからです。ですから本来の、天地と同根万物と一体なる自然に還つた時に起つて、一種不思議な感覚的現象も、不思議な事ではなく極当然な出合つて過ぎなのです。

坐禅しなくとも、このよくな一瞬は、誰でも生涯幾度も在るものです。

じゃあ、何でこんなに素晴らしい精神が、知性や感性が煩惱に成つたりするのかといふ疑問も、大変含みがあるものです。煩惱といつるのは貪瞋癡。つまり貪りや妬みであつたり、恨みであつたり怒りだつたりで、人間性を著しく破戒する精神作用です。健全な共存的関係性を破戒をする根本原因です。

又この根本原因がアホらしくほど単純なので、呆れてしまひます。生命誕生とその発達と類似してゐるのも面白いです。

「」と號さん出合つてしますけれども、いきなり殴り合ひ殺し合つては絶対に無い事です。然しそうして、対立抗争の特殊な環境に成つた場合、各自の自尊心を著しく傷つけ合つたりしたら、それが波風を立てて感情を刺激し

ます。それが激しくなるに連れて倫理道徳性は、強烈な衝動力によって簡単に退けられてしまうのです。

即ち、今、今、是の瞬間、瞬間に於いて、自覚と意志に基づいて作用する、健全と称する精神は極めて無力だと言つていいです。その理由は、過去世の内在精神である動物的精神、つまり弱肉強食の残酷性や攻撃性が主力となるためです。知性の何処かで、それは違うぞと叫ぶ人間的な自覚が有ったにせよ、超時間的、超空間的在来精神の持つ支配力は絶大な者です。種や国家の存亡とか、信仰や魂が侵されたとか、愛する者や家族とか生命の危機に直面すると、血の氣の多い者ほど自然発生的に殴る蹴る、殺すところ行動に及ぶのも、いつしたちやんとした因果関係があるからです。

事の発端は、ただ、念がぽんと湧いて出てきた事によるのです。今、今、その時その時、発生する念が動物的本能に由来し始めたら、相手に勝ちたこと言ひ弱肉強食の念がエスカレートして行く。我々が過去世を背負つた生き物である以上、この荒々しい動物的精神作用からは、容易に脱却するとは出来ないのです。知性とか理性とか教養とか言つてますけれど、それら自体が空なる作用です。そんなものは過去世の一念によつて簡単に吹き飛んでしまいます。

本来のハードに秘められている歴史的な業、即ち貪瞋癡の煩惱が我々に粘着している限り、何時現れるか分からぬいし、たつたの一念が大変なことを起します訴です。これぞ正に煩惱です。諸悪の根元です。

従つてそのよつたものを強く刺激する言動とか環境を、如何に作らないようにするかです。正に一人々々の心の自覚と浄化に掛かってじるのです。これを解決付けることを悟りといつのです。どうしても禅が必要だし、どうしても修行しなければ解決出来ない大問題です。

人間が居なければ存在も分からぬいし、法も存在しないので、是も無ければ非も無い。ただただ、自然の環境がそこに無常の流転のまま在るだけです。人間が眼耳鼻舌身意の意を持つたために、存在を認知し、自他を認知し、是非を認知し、していい事悪いことを認知し、生死を認知し、恐怖や悲しみや喜びを認知する。つまり意に拋つて存在が始めてはつきりしたのです。

言つなれば、この時宇宙が生まれたのです。釈尊は是れを「三界唯一心造」と云われました。この宇宙は、われわれ人間が意を携えた時、始めてそこに存在したのです。この意によつてこちゝが浮かび上がり、存在してへむ。又これに拋つて迷いが始まつたのです。

それでさつき、貴方が言われた、悟りとは存在を超える、忘れるとはなじかと。正にそつなんです。意に拋つて存在してこの世界だから、この拘る意、認める意、執着を起す意。根本である是の意を超えてしまつたら存在が無くなるのは当然でしょ。我を忘れる。無我とはその事です。自我としての意が亡くなつたり、即宇宙大です。テリトリー

が無いからです。

しかししても一切皆空に行き着くしか無いのです。つまづかるといつは、一切の存在を一回超えるといつです。だが無我の世界は無我に成つてみなければ分からぬい。無我に成らなければ全てが治まらぬいし、過去世の一切も解決しないのです。

無我になるためにせ、一つ事に没頭して我を忘れるといつです。しておるその事を忘れ、している自分を忘れるとい、無我の方からやひて来るのです。徹すると身と心が一つになつ、隔てが取れて身心一如となり、そのまま心身が脱落して無くなるのです。この明確な消息が悟りです。これを獲得するための坐禅であり修行です。以上でよつはじつよつつか?

参禅者A： 正直理解出来ない、と言つより、本来说明すべきなことじうを説明して頂いたといつ。やつまでも伝えられる物では無いといつ。まあ、言葉で聞けばそういうもののなかなどいつも氣がするんですが。先ほど仰られた、意が生じたから人間的なものが生まれたのですが、意は何処から生じてきたのか、といつのが疑問なのです。どんどん原因を探つていくと、最後に行き着くといつがあると思つことですけれど。そじが何んなのかといつが知りた

い。そんな物が知性で捉えられる物では無いかも知れないのですが、一番最初の、何故それが存在したのか。その存在があるて、それがどうして派生したのか。派生しなければならないのか、と言つ事がやはりしつくり来ないのです。老 師・ 貴方の疑問は良く分からます。自由闊達な心は、心無所住而生其心です。まわりに住する處無くして而も其の心を生ずです。そうした機能が有るために、縁に応じて知性は知性として、感性は感性として、瞬間瞬間作用し、瞬間瞬間流転して、生滅を繰り返す、「これが心です。それだけです。それ以上も、それ以下のものも無い、今、それ自体で全てです。

意が何処から生まれたかを知りたい、と言つとも分かります。しかし、心の正体は、先ほども言つたように何も無いのです。ですから生まれる処も無く、又消えて行く処も無いのです。幾らこの事を、知性を駆使して推考し尋ね廻しても、本来無いのですから、決して貴方の求める解答は得られません。有ると思つても無いのが心であり、無いと思つても有るのが心です。だから、縁に依つてそのように働く靈体と言つしかないのです。

有るとしたら、今、この瞬間、眼耳鼻舌身意が、色声香味触法としての感覺作用を知覚し意識していの事実。それは場所的な存在でもなく、精神的特別空間的存在でも無いのです。だから貴方の言つ、行き着く処などは何処にも無いのです。今、是の瞬間の作用でしか無いので、本当の心を知るために、是の瞬間に撤するしかないのです。そこが心の生まれる処、滅する処であり、それが心そのものであり、行き着く究極が今、この瞬間です。

意が何時、何故存在したのか。どういう動機で意が存在したのか、それがどうして派生したのか、といつ事は先ほど言いました。ところが次の、意がどうして派生しなければならないのか、と言つ質問は、私も三世の諸侯もその外のことは分かりません。

意の派生を分化と広がりや多様化とするなり、善し悪しは別にすれば正に成長そのものの様子と言つことになります。ひとつこの子が私の子でなければならぬのかとか、この人がどうして私の親でなければならないのかと言つた疑問には、普遍的な答えなど何も無いのです。日々自然の縁に依るもので、而も縁自体が無自性空ですから、その必然性を見つけ出そうとしても、全く無理であり意味の無いことです。

赤ちやんこは眼耳鼻舌身意がありながら、意が未だ作用せず発生しておりますから、命に關わる空腹であつたり、暑さ寒さであつたり、危機的な状況だつたりすると、泣いて状態を知ります。この中には別に意が有る訳じゃないのです。前因縁による生命維持のための自然の妙智力です。それこそ生命進化の過程で勝ち取つて來た能力です。意ではないと言つことです。

般若心経に出でくる意は、言語を携え意味や概念を獲得して、是れは何何だから何何だといつ思想回路が出来て、それを用ひる、それを意と云ふのです。だから法になるのです。

存在を認識するだけの意と、認識している自分を認識する意とでは、作用に天地の違ひがあるのです。前者の意からは文化や哲学や科学は生まれません。況や宇宙は存在しないのです。幼児や他の動物に意が有るにも拘らず、何らの文化も形成されないのは、意が法に成るまでの内容が無からです。ですが拘りもなく対立もない自然の意です。隔てない實に純粹で暖かい、自他不一の自由な意即心です。

後者の、自分の存在が自覺出来るようになめた時の意は、確かに知的所産の計り知れない力と働きは巨大なもので、今日の文明がそれです。しかしこの意は、認識している自分が自覺される、と言つ事は心身の隔たりを意味したものです。この隔たりの意が有るために、拘りを生み対立を起しますのです。言つなれば自我煩惱にまみれた意なのです。

従いまして、私達大人の判断回路と判断材料と動機によつて、自由闊達に行行為し行動しても、意が無ければやれらの全ては瞬間の作用でしかありません。と言つことは、過去も前後も全く無く、損得も是非も無い自然の働きの痕です。対立も無いのです。だから一切の問題が発生しないのです。

最も健全な意とは、前者の自然の意に拠つて、後者の高度な文化的意識的な意をコントロールするのです。理

論的には不可能ですが、禅的に言えば是れが自然であり本来なのです。

只見、只聞き、只考える時、意は無いのです。私たちは認識するといふります。「」の無限大の存在の中の、ある特定の物に意を用いた時に始めてそれを認識する。従つて認識する時には、必ず意がある。「」の意が無我であることを会得してしまつたら、意が意でありながら、天然の作用ですから、拘りの意では無くなるのです。つまり意を用いるくしながら、意に毒されない。自由自在に判断回路も判断材料も駆使して、理想を実現していく本来の無我の意。自己不一の大乗精神が是れなのです。

是の意が諸悪を生むと言つましたが、「」の悪を為す意は、過去の引きあつてある弱肉強食や勝他の意です。自我の要求と執着の意です。それが煩惱です。

それで、「」の意、つまり心そのものが修行対象となつてゐるのです。

これは貴方の「」質問とはちよつとそれとけれど、例えば梅干しを口の中に入れる。酸っぱこと感ずるのは意が有るからではないんですね。本来の機能がそつあるからです。何で「」などに酸っぱいのか、と擬議すれば、そういう意が立ち上がつた時なんですね。従つて意を解決しようとするなり、味のままにしておく、天然の作用のままにしておく。意を持ち出さない、手を着けなさいとです。血口の発動する以前の、自然のままなれば、意を超越してござります。「」を真剣に工夫し練るのです。分かりますか？

参禅者A・ 正直なところ分かるような分からぬよつた。

老師・ 実際に本当に本當の味とは何であらうか、何處から来るのか。と参究するのです。

眼においても耳においてもです。じつなことでも内容に捕らわれずに綿密にこれ何ぞ、これ何ぞと追究するのです。「」にて意が起る元を求めるのです。実参実究自知する世界であつて認識論や概念の上で分かる「」では無くてのです。大いに大疑团を起して、実参して、一瞬一瞬の本質に迫るのです。そこを間違えなければ、はたと手を打つて納得する時節が必ずやつてくるのです。

参禅者A・ 有難うございました。

老師・ 因みに貴方は何を勉強なさいましたのですか。

参禅者A・ 何をと云ひはりますか。

老師・ 今のような質問が出るところには、哲学的精神的に相當深く洞察してきたところが考えられませんからね。

参禅者A・ そうですね、仏教は全然分からなかつたのですが、一通り読みました。……（よく聞き取れず。）

老師・ そりやあ、大したもんですわ。その知識は後に生きてきますから。今は、究極の所に向かつて参究する」とことです。折角の広い知識を活かすには、隔てを取つて身心一如に田観める「」です。時々、今、「」のままで究極ですか？邪念を加えず「」するのです。自然に任せて徹底純粹に「」やつてください。「」の工夫をして下さい。

参禅者A・ 有難うございました。

参禅者B・ 和歌山から参りました脇谷と申します。広島の道場では何度もお世話をうけたことがあります。東京は始めてで、宜しくお願ひします。

老師・ 「」苦勞様です。うわー嬉しきですね。又ございへだせ。

参禅者B・ 有り難うございました。

参禅者C・ 神奈川から参りました笠原と申します。広島ではお世話をうけました。その時は十日間お世話をうけたのですが、「」では四時間坐禅して、もつ、厭つ。（大爆笑）雜念は淨えず、囚われまくつの坐禅でした。また少林窟にて修行させて頂きました。お願いします。

老師・ はは、又お出で下さる。あのね、よしんば少林窟に来られたとしても、平素、言葉と言葉を繋いで思考し、比較をしたりして思考経をフルに動かしています。喻え少林窟へ来て、半日や一日は妄念妄想に振り回されるのです。波立つておるバケツを置いて、波は直ぐ止まらないことになります。しかじかと置いておけば

自然に治まるでしょう。

「これは急所です。騒ぐ心を何とかしなさい、その上に計らいを重ねないことです。従つて少林窟にきたら、何もしないで良いのですから、只じつとしてこのままです。一呼吸を真剣にしたいのです。今まで持ち歩って揺さぶつていたバケツを置くのと同じです。自然に言語野が静まり、心が静かに成るのです。

最初の三四口のあの苦しみは、短くて済みますから安心しなさい。しかし、一口や一口は頭の波が治まつかるまで大騒動するところだけは保証付きですから、覚悟しておこななさい。

参禅者C・・ 有り難うござります。

参禅者D・・ 参禅のお願いは如何様にすれば

老 師・ 道場に電話でもメールでも結構です。（以下略 インターネット上に詳しく述べておきます。）

坐禅そのものが初めてだとこつ方に感想をお聞きしたいのですが。

時間が無い？ では質問をどうぞ。

参禅者E・・ ハー。あのー。女性と関係を持つ時に、そのような気持ちで関係を持つてこひもよのこじゆうか。

老 師・ そりゃ本人の世界ですし、何と聞いても秘め事ですか、当人同士で好きなようにしてくだされ。それが大事なのです。それがその時の道ですか。

参禅者D・・ そういう風にやつてこくと凡欲の中に入つてこへんな気がします。果たしてそれが良いのか、又は心持ちでやつてこのか、関係性の問題もありますので、どうなんだろうかと。

老 師・ 好きだなあ、一いつ破天荒な質問。（一同爆笑）歴史的ですね、女性のお腹の上で墮つた祖師もおふんです。だからと聞いて、それは上々とはかり同じよつなどをして、やつはこかぬ。その時の縁が全く違うからです。平素純粹に一生懸命端的を鍛つてきて、時節が純熟していたからです。無我夢中になつて成り切つたのです。真箇自己を忘じて解脱したところわけです。その行為自体に悟りの素養があるわけでは無し。

全てが縁ですからね。縁は全て空ですか。平素心して一生懸命修行しておゐせのが、そつこつ場面に立った時に、成り切つて我を忘れ空を体得するのです。我を忘れて情欲に落ちたのは迷いです。単なる姦欲です。

ですから貴方が悟りを目的にして真剣に努力しておる時、束の間の一つの行為としてそつこつ関係があつたとしますが、それも修行であつたと願つなれば、本当に真剣にやつなさこや。情欲に真剣になるのでなつのですよ。行為に真剣になるのです。それだけのことです。

本当に真剣に菩提心が起きてこらなれば、修行が気になりますから情欲に溺れるといはれはまず無しです。何となれば、本当の菩提心は他を見ませんから。

しかし、喻え悟つた人もそつこつ機能を本来持つてますから、夫婦として必然的に起つる自然な行為です。如何なる事でも常軌を逸してはならないのは当然ですから、健全な縁に於いては、お互により効果的にするほど宜しいです。悟つたが為して、その機能が消滅したんじゃ人類滅びます。

悟つてもちゃんと機能しなければ嘘ですから。じゃ、道としての自由と不邪淫とはいいが違うのかです。それはちゃんと弁えることなのです。それが道です。していい関係としてはならない関係が厳然として有るでしよう。すべき人とすべき時にちゃんとすむことです。節操は保つていかないと、人間としての自律が失われたら社会が滅びるんです。

又、夫婦として健全であることは、為すべき事をちゃんと為して、お互にを慈しみ愛おしむ事からです。そつくると夫婦の関係は深く交われば交わる程に、同じく無条件の信頼関係にならなければなりませんが、離らしかったら不健康であつ侮辱してこらな」ともあるのです。

必要且つ真に聖なる行為なのです。けじめと責任を伴つた愛の結晶としての行為でいい、血の滴る暖かい人間であると同時に、崇高な靈的信念を持つて命を育むに相応しい姿なのです。真剣に生きるからこそ、それが必ずから

秩序となり、道となるのです。真剣でなければ、その愛は忽ち朽ち果ててしまひ、その行為は淫乱にして不潔です。本物の愛情には必ず秩序と責任が有るもので。情欲は種の継続と繁栄をもたらせますが、情欲に翻弄されると人の人世まで那落に落としてしまないので、喰え腹の上で悟った人が居たとしても、人の道だけは踏み外してはならんじ[ハリ]ことなんです。まあまあ。(快笑)

でも久しづりの過激な質問、面白かったです。」の問題は、まだまだ言いたいことが有るんですが。

参禅者E・： はい、有難うございました。

老師： では、よろしくどうぞ。

世話人： 丁度五時になりました。それで茶話会を終わらせて頂きたと思ひます。じつもいかがでした。

一同： 「馳走様でした。

平成十六年一月十四日